# あの人を重ねて

kwhr2069

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

偶然出会ったその人に、自分の大親友を重ねた――。

決して、似ているわけではない。だけど、どこか。

そして何故か、その人のことをもっと知りたいと思った。

そしてお互いは、いつしか――。

これは、夏もまだ始まったばかりの頃、一つの小さな出会いから巻き起こる物語!!

と、いうことで。ＨＢＰ第三弾！希＆鞠莉の誕生日記念話です。

今回も、ラブライブ！サンシャイン!!のストーリーから約二年後の世界を描きます。

希は社会人二年目、鞠莉は大学新二年生くらいの年です。
＊これは、ラブライブ！サンシャイン!!をラブライブ！の四年後の世界だと考えた上での年齢になっています。
キャラクターをアニメ通りに描けているかどうかは微妙ですが、そこは年が経ったからということでご容赦願います。
ちなみに、ＨＢＰについては、第一弾：ＩＤ１４３６０２、第二弾：ＩＤ１５４６６５の方でご確認してくだされば、と思います。

批評とか、感想とか、お待ちしていますので、気兼ねなくどうぞ。

# 目次

希side ―― 1
過去と今 ―― 12
鞠莉side ―― 22

# 希side

「ふう。…ここが、イタリア、ミラノ…」
見慣れない街の様子を見回しながら、そう呟く。
私にとっては、この景色すべてが、とても新鮮に思える。
そう言えば、ヨーロッパに来たのはこれが初めてだ。
再度、見慣れない街を見回してみる。

と、そこで。
「…え、絵里ち?!」
久しぶりに見かけた金色の髪に、つい身体が反応する。

が。
「…て、髪型全然違う…。勘違い、か」
髪色だけを見て勘違いした自分が情けない。
最後に会った時のあの人の髪型とは、全く違っていた。

「(…いつまで私は、絵里ちのことを引きずるんだろう)」
その人は今、近いようで遠いような、ロシアにいる。
私は未だに、あの人のことばかり頭に浮かぶことがよくある。
それほどまでに強く想っていた、ということなのか。
「(って、折角のイタリア観光なのに、暗い気持ちになっても意味ない！楽しまんと！)」
下がる気持ちを抑えようと自分に言い聞かせる。
そして私は、知らない街に足を踏み出す。
これからの観光への期待に、胸を膨らませんとしながら。

＊　＊　＊　＊

私、東條希は、音ノ木坂学院を卒業後、とある四年制大学の文学部英語英文学科に入学した。
将来はツアーコンダクターになりたいという思いからだ。
大学を特に問題なく卒業し、旅行会社に就職。
始め間もない頃は、未知なことばかりで戸惑うこともよくあった。
けれど、今年でもう二年目。
大事な資格も取得して、本格的にコンダクターとして働くことができるようになって

きた。
とある、なんとなくの興味から入った世界だけど、今は自分の選択に納得している。

だけど、やはり。
何かが、足りない。
ふとした時に、そう感じてしまう。
高校の時の親友たちは、全く違う道へと進み、連絡もほとんど取っていない状況。
一人は、東京にいるため会おうと思えば会えるが。
もう一人は、ロシア。会いに行くのはかなり余裕がないと無理である。
そのような気持ちにならないために仕事に打ち込むが、心はそう簡単にいかない。
どこか、心に穴が開いているように感じながら過ごす日々が続いている。

そんな中で舞い込んできた、一つの話。
会社を挙げて、海外の国の観光地を回るツアーを、本格的にやろうという試み。
それが、今回のイタリア観光の大きな目的だ。
土地視察という名の、イタリア観光である。
私が選ばれたのは、少し経験を積み始めていて、まだ新人ということで、学ぶことが

多いから、だと思う。
そんなこんなで、一人海外の地へと飛んできたわけである。

昼間には色々な観光地を回り、夜には、ホテルに戻り一人、残したメモとにらめっこしながらスケジュールについて考えたり、翌日はどこに行くかを決めたり。
忙しく、少し大変なところもあるが、充実しているように思える。
本当に充実していたのだろう、イタリアでの三日間はあっという間に過ぎ去った。
そして私は、日本へと帰るために今、空港にいる。

そこで、また。
「(…あの金髪の娘(こ)、確か…)」
二日前にイタリアの街中で見かけたのと同じような髪色、髪型の人を見かける。

と。
「Ｏｕｃｈ!!」
後ろから走ってきていた男性にぶつかられ、手に抱えている荷物を落とす。
「…Ｏｈ，Ｓｏｒｒｙ…」

言われて気付いた。
私は、考える間もなくその子の荷物を拾うのを手伝っていることに。
まるで、身体が勝手に、その娘と関わることを選んだかのように。

「…えっ!?」
すると突然、声をあげられ、その娘の顔をふと見る。
「あっ、いえ… その、日本の方、ですか?」
その口から流れてきたのは、なんとも流暢な日本語。
「はい、そうですが…」
と、床に落ちているものの中に、何やらカードのようなものを見付ける。
拾ってみると、学生証だった。
アメリカの、かなり有名な大学のもので、ローマ字で〝オハラマリ〟と記してある。
「貴女も、日本の?」
学生証を渡しながら尋ねてみる。
「はい、そうです。
…とはいっても、アメリカとのハーフで、大学もアメリカに行ってるんですけれど」
ハーフだったのか… なるほど。…って、何がなるほどなんだか。

「そうなんですね・・・。あれ、では、どうしてここに？」
「ああ、実は昨日まで、この近くの大学に短期留学していたもので」
「短期留学？」
「はい。イタリアで、商業のＡＢＣを学んで来いと、父から」
「なるほどねぇ・・・」
商業のＡＢＣ、なんてハーフっぽい響き・・・　って、なんか失礼か。

それにしても、だ。
初対面のわりに、何故か普通に会話しているのはどうしてなのだろうか。

いや、自分ではわかっているはずだ。

でも。
それなら、相手がこちらと話せるのは何故なのだろうか。
「「……」」
ふと考えている間に、沈黙が流れていることに気付く。
でも、今更だな。

落ちた荷物を拾い終わり、確認する彼女。
「…うん、ダイジョブかな。
あの… ありがとうございました！ホントに助かりました」
「いや、ええよええよ。困っとる人には手を差し伸べるものやん？」

…なんで私は今、あのしゃべり方をしたのだろうか。
ふと気付いた事実に驚愕する。

「あの… すみません」
「…はい？なんでしょう？」
「何か… 悩みごとでもあるんですか？」
「…どうして、そう思って？」
「いえ… なんとなく、なんですが」
……。ここまで来たら、だ。
打ち明けてしまった方が、気持ちもすっきりするのかもしれない。
いや。

私は最初から、この人に悩みを話したくて近づいたのかも。
だから私は、自分が今抱えている悩みを打ち明けることにした。

＊　＊　＊　＊

もちろん名前とかは伏せたが、話せることは話した。
高校の頃の友達と、卒業以来なかなか会えていないこと。
今でも、楽しかった頃の日々を懐かしんでは感傷に浸ること。
そのせいで最近は、色んな事が少し辛いこと。
話すと、なんだか肩が軽くなったような、そんな感じがする。

話し終わるとマリちゃんは、少しばかり声を震わせながらこう尋ねてきた。
「…失礼ですが、おいくつ、なんでしょうか…？」
「えーと、今年で２４に」
「すみませんでした!!」
突然謝られた。
「あの、てっきり、同じ位の年かと思ってまして…。ワタシ、調子乗って…」
そう言われてみて、今気付いた。

この娘は、私より幾分かだが背が高いことに。
でも、幼くみられるなんて… 初めてかも。
「いいって、気にせんで。ほら、顔上げ?…ちなみに聞くけど、貴女は何歳?」
「ええと… 今年でちょうど２０です」
２０、か。思ってたよりも、若いなあ。
ということは私は、４つ年下の娘に悩み相談をしたということだ。
なんか、恥ずかしい…。

「…それで、アナタはどうしたいんですか?」
気を取り直したのか、マリちゃんが再度尋ねてきた。
「どうしたいって… その友達のこと?」
「ハイ。やっぱり、会いたいとか、思いますか?」
「う～ん、どうやろ…。なんといっても、ロシアやからなあ。無理じゃない?」
「そういうのはナシで!会いたいか会いたくないか、の二択です!」
…急激になんかアツくなったなあ、この娘。

でも…。

「それはもちろん…　会いたいに決まってるやん！」
この娘には、嘘はつきたくない。
だから、正直に。心の内を、晒す。
マリちゃんは、少し嬉しそうに頷く。
そして、こう言った。
「それなら…　行きましょう、ロシアへ！」

なるほど…　ロシアにね、でも今からは、流石に遅くない？
…って。
「えっ？」
「ラッキーなことに、もうすぐ着くはずです。アナタも、一緒に乗って下さい！」
「いや、え？何の話よ、ちょっと?!」
「ハイ？ですから、今からロシアへ…」
「いやいやいや、おかしいって！てか今からって？どうやって？」
「それはもちろん…　あ、キタキタ」
マリちゃんが見ている先を見てみると、そこには一台の小型ジェットが。

こ、小型ジェット?!
「え、もしかしてあれで行くん?」
「モチロンです!さあ、早く!時間は待ってくれませんよ～」
「ちょっ、腕、引っ張らんで～」

ちょっと、どういうこと?!
いきなりロシアに、って。わけわかんないよ。

…でも、なんだろう、この気持ちは。
なんか、面白そうやん!?

そう思いながら、私の腕を引っ張るマリちゃんの顔を見る。
すると、丁度こちらを見てきて、目が合う。
「さあ、Ｌｅｔ，ｓ　ｇｏ!!デ～ス!」
そこには、私の一人の親友とはかけ離れた表情、でも、見ていて全く苦しくない、屈託のない満面の笑みが浮かんでいた。
「…うん!レッツゴー!!」

# 過去と今

昨日は、ホントにビックリした。
何と言ったって、たまたま空港で会った人が、スゴく果南に似ていたから。
おかげで、ついうっかり声まであげちゃって。
でも、話すうちに、どういうわけか親近感が沸いた。
ただ似ているというだけではない、ナニカがあの人にはあった。
〝トウジョウ　ノゾミ〟という名のあの人には。

…なんてチョット、ロマンチストすぎかな？

あの後ロシアに行ったけれど、そもそもノゾミさんは友達のいるバショにすら見当がつかないそうで、結局ホネオリゾンになってしまった。
ワタシの、突拍子もない行動のせいでかなり迷惑を掛けてしまった。
直前に年齢を聞いていたにもかかわらず、そんなことを忘れて、思いのままに飛び立ってしまったジブンが情けない。

ただ二ホンに着いた時、ノゾミさんは、どこか晴れやかな表情をしているようにも見えた。
その表情が、どういうイミだったのかはあんまり分からないけど、その顔を見てワタシ自身ホッとした気分になった。
ワタシのあの行動が、ノゾミさんの気分のリフレッシュになったのか。
そうだったらイイな。
なんとなくだけど、ノゾミさんが苦しんでいるようなところは見たくないと思うから。

ところで今、ワタシはアメリカに帰ってきているわけなんだけど。
…短期留学のレポート、あまりにもクレイジーな量で終わる気がしないヨ～！
こういうのを書くことになる覚悟はモチロンあったけど、想像以上の量だったわ・・・。
こういう時ダイヤは、『全く・・・　準備していないからでしょう?!自業自得ですわぁ?!』とか言うんだろうな、クスッ。そんな風に言いながら、結局イロイロ手伝ってくれるダイヤ。
そして。
そんなワタシたちの様子を、優しいスマイルで見守ってくれる果南。

…やっぱり、あの二人との高校生活は、何だかんだで良い思い出がイッパイだ。
ギクシャクしてた期間の方がずっと長いはずなのにな、スゴくフシギ。
楽しい思い出の方が記憶に残りやすいというのは、ホントのことなのかも。

でも、今は…。
…って、今はこんなこと考えてるヒマなんてないや。
急いでレポート終わらせなくっちゃ！

◇　◇　◇　◇　◇

「…うん、これでよし、っと！」
イタリアでの三日間の土地視察を終えて帰国した私は、その成果をまとめて書類を提出することになっていたのだが、順調に進んで今、完成させることが出来た。

昨日は、マリちゃんに突然小型ジェット機に乗させられてロシアに行き、居場所が分かるわけでもないのに絵里ちを探し、案の定見つからず。
貴重な時間をとってまで無意味な事をして悪かった、とマリちゃんは言っていた。

でも私にとっては、全然無意味な事なんかじゃ無かった。
これまで絵里ちのことで悩んでいたのが、なんだか馬鹿らしく思えた。
マリちゃんは、ロシアなんて全然遠い国じゃなくて、行こうと思えばすぐに行けるんだと教えてくれた。まあ当の本人は、そんなこと考えてなさそうだけど。
また、思案して悩むなんて、私の柄でもないことをしていたなあとも思った。
そして何よりも、マリちゃんの心遣いが嬉しかった。
こんな変な悩みを真剣に聞いてくれて、それにベストアンサーを導こうとする姿勢。
若さって、いいな。
そんなことも思った、って、いつから私はおばさんみたいになってしまったのか。

だから、私は。
もう、考えすぎるのはやめる。
今思うと、高校生徒会の時も、考えるのはいつも絵里ちで、私はそれに賛否の声をあげていただけ。いつだって私は、考えすぎないようにしてきた、はずだ。
そう考えるとやっぱり、マリちゃんは絵里ちとはかなり対極的な性格をしているように感じる。
それなのにどうして、私は似ているなんて思ったのだろう。分からない。

…って、こういう風に考えるようになっているからダメなんだった。
これからは私も、楽して過ごしていきたいと思う。
その方が私の性にも合ってるだろうし、きっと楽しいはずだから。

◇　◇　◇　◇　◇

アメリカの大学のサマーヴァケーションはスゴく長い。
一般的に6月の上旬頃から9月の上旬くらいまで、約3か月間ある。
そういうわけでワタシの通っているトコも、もう休みになった。
イロイロやりたいことはあるけれど、やっぱり何よりも沼津に帰りたい。
でも今帰ったところで、他のＡｑｏｕｒｓの皆はまだ休みじゃないだろうから、ヒマだ。
だからチョット、私は手持ちブサタな状態。
最近までアメリカを離れていたから、もう少しコッチにいてもいいかも、なんて考えてる。
早く、二ホンの大学がヴァケーションに入って、と思いながら日々を過ごす。

そんな中で、沼津へ帰ることが楽しみなのか、ワタシはよく夢を見るように。
よく見るのは、沼津で過ごした日々の、楽しい記憶たち。
毎回、楽しいキブンになったところで目が覚めてしまう感じで、ワタシ的には少しイヤな気もしたのだけど。

でも、何故か。
その何日分かの夢の中に、果南だけが、一度たりとも出てこなかった。
代わりに、なのかは分からないけど。
ナゾなことに、一度だけノゾミさんが出て来た。

少し会って話して、一緒にロシアへ行ったわけだけど。
ワタシは勿論、ノゾミさんのことを知っていたわけでも、昔会ったことがあるわけでもない。
むしろ、ノゾミさんのことは、全く知らないようなものだ。
それなのに、私の大親友と重ねて考えるほど、あの人の存在感が大きいなんて、そんなことがあるのか。
…って、これはケッコーノゾミさんに失礼かも。

とにかく、ワタシの中でノゾミさんがどういう存在になっているのかが、分からなくなってきたのだ。

ただ、これだけは言えるかもしれない。
ワタシは心の中で、少なからず果南とノゾミさんが似ているように感じている、と。
そして、こんなワタシの悩みも、きっと夏になれば解決するだろう、と。

だからワタシは、今はとりあえず時間が過ぎていくのを待つだけ。
きたるべき夏のその時に向けて。

そうしてワタシは、時機を見計らい、7月も中旬に入った頃、ようやく沼津に帰ることにした。

◇　◇　◇　◇　◇

8月。
それは、世間的にも夏休みとなり、バスツアー界隈の方もかなり忙しくなる。

その少し前の段階から、色々と段取りなど丁寧に整えていかなくてはならず、やはり夏は凄く大変な時期なのだ。
勿論休養日のようなものは与えられてはいるが、何だかんだで仕事に追われてしまう。
そのため、その7月の中旬頃にちょっと有給を貰い、来るべき夏に向けて調子を整えていく人が結構多い。
そして例にもれず、私もその一人。
私は大学生の頃から、夏休み初頭にはパワースポット巡りをよくやっていた。
去年は社会人になりたてで、そんな余裕もなかったけど、今年は約一年半ぶりにパワースポットを少し巡ってみようかと思う。
それで、今年行くことにしたのは、とある島の神社。
実質無人島とのことで、水族館などもあるらしく、一人で行くのは少し躊躇われる部分もあるが、面白そうなのでそこに決めた。
調べてみるとどうやら、二年前のラブライブ！の覇者がこのあたりで活動していたらしい。
その聖地として、巡礼に訪れる人も少なくないのだとか。
「ラブライブ！かあ…。六年前、なんだもんね… 懐かしいな」

ぽつりと言葉が零れる。

私はスクールアイドルμ'sの一メンバーとして六年前のラブライブ！の覇者になったわけだけど、有名になってすぐに消えていったから、あまり知っている人もいない。

勿論、私がμ'sの東條希だと知ってくれている人もたまにおり、そんな時は高校時代のことが想起されて、なんだか感傷に浸ってしまうこともある。

私たちが優勝した後、ラブライブ！は社会的にも広く認知されるかなり大きなイベントとなり、私たちが残したかったものはしっかりと残すことが出来た。

大学に入ってからは、なかなか見る機会はなかったものの、たまにＴＶで特集番組のようなものも放送されてて、その広がりはある程度ではあるが、やはり感じることができていた。

もっとも、何人かはライブを実際に見に行くようなこともしていたみたいだったけど、私にはそこまではなく。

結果として、最近のラブライブ！の状況に関しては詳しいことは全く分からない。

一般人と同等程度の知識しか持っていないような状態になっている。

だから、二年前の覇者と言われても、ピンとこないのだけど。

まあ、せっかくこの島に興味を持ったことだし、色々見て回ってみるのも面白いかも。

と、そんなことを考えている時に。
スマホが、一着の電話を受けて振動する。
見知らぬ番号だ。
「はい、東條です」
もしもし、と向こうから声がして、そう応える。
なんだかどこかで聞いたような声で、記憶を探る。
そうして名乗られた電話主の名前は、予想外すぎる人で。
「…えっ?!嘘やん!?」
思わず口を突いて出たのは、そんな一言だった。

# 鞠莉ｓｉｄｅ

「ふぅ～、やっぱりマイホーム、というのは落ち着くわねぇ～」
自宅、もといホテルオハラの自室。
アメリカからの帰国後、荷物を置いてバルコニーから海を眺め、そう呟く。
「…Ｂｅａｕｔｉｆｕｌ…」
久しぶりに見た景色に、思わずそう言葉が零れる。

ふと。
昔の記憶がよみがえる。
港の方から一筋の光が照らされ、嬉々として家を出ていたあの頃の記憶。
そう、ワタシが今でも忘れることのできない、あの二人と過ごした日々の記憶。
『この空は繋がってる、どんなに遠くてもずっと』
ワタシが果南に言い、言い返されたそのセリフが、ふっと思い浮かぶ。
空を見上げるとそこには、向こうではなかなか目にかけることがなかった満天の星

空。
どの星がどの星座とかは分からないけど、昔、色々教えてもらった記憶が浮かぶ。
「やっぱり、ワタシにとっては、この場所が…」

と、その時、コンコン、と部屋の扉が叩かれる。
「鞠莉お嬢様、お母様がご帰宅されました」
「あら、そう。ＯＫ～、すぐ下に向かうわ」
そう答えて、自分の荷物を整理することに。
下に向かうついでに、色々買ってきたものを持っていくのだ。

そこで、何となくふと思いつく。
久しぶりに、淡島神社へ行ってみようと。
最後に行ったのはいつだっけ。
まだダイヤは東京にいるみたいだし、果南はいないし。
せっかくの機会だから、いろんなトコに行ってみよう、誰も連れず、一人で。

明日は…　雨が降るかしらね？

＊　＊　＊　＊

果たして。

天気は、見事な晴れだった。

「やっぱり、ダイヤか果南なんだわ、Ｒａｉｎｙ　ｇｉｒｌは」

これまた、高校時代の記憶がよみがえってきた。

あれは確か、浦の星でやった閉校祭の、少し前くらい。

卒業後どこに行くかを、初めて三人で話した日。

ずっと皆一緒にいられますように、と星に願った日。

「結局、今は皆もう離れ離れ…。やっぱり神様はカンドー、ね」

ここにいると、昔の記憶がいっぱい頭の中に流れてくる。

ワタシにとっては、それが懐かしく、また少しだけツラい。

そんなことを考えながら歩いているうちに、神社の入口のところに来た。

目の前には、懐かしい階段が、上まで続いている。

いつぶりなのかしら、と思いながら、ワタシは階段を昇り始めた。

久しぶりだったからなのか。
階段は、思っていたよりもキツかったが、ようやくもう少しで終わりが見えてきた。
「(…あれ、でもワタシ、どうしてここに来ようと思ったのかしら?)」
今になって浮かぶ疑問。
しかし、それも束の間。
階段の最後の一段を昇り、ワタシは無事に頂上へ着いた。
達成感に浸っていると。
目に入ったのは、一人の女性。
その姿は、どこかで見た覚えがある。
もしかして、
「…か、果南?」
いや、違う。
果南とは違う、でもなんだか似ている。
そう、あのヒトは。
「…ノゾミさん?」
手を合わせ、お参りをしている人にそう尋ねる。

礼を終え、頭をあげてこちら側を向いたその人は。
紛れもなく、イタリアで出会ったその女性だった。
「マリ、ちゃん?なんでこんなとこに?」
驚いた顔でそう聞いてくるノゾミさん。
「いえ、それは、コッチのセリフ・・・ ノゾミさんこそ、なんでココに?」
「私?私は、まあ・・・ 気分転換、てとこかな」
「気分転換?」
「うん、パワースポットって言われるようなとこに行って、気分転換するん」
ウーン、分かったような、分からないような。
「それで?マリちゃんはなんでココに?」
「ワタシは、元々の自宅がこのあたりなので・・・」
「あっ、そうやったんやね、それはなんや、えらい偶然やね」
「ノゾミさんは、たまたまココを選んだっていうことですか?」
「まあ、そういうことになるね」

…なんだかワタシは、大変な偶然にあってしまったみたい。

＊　＊　＊　＊

地元の人なら、と、ノゾミさんの提案で、淡島のことを色々教えながら歩いて回ることに。

ワタシ自身久し振りのこの場所なわけだけど、ホントに懐かしいトコばっかり。

その後、少し歩き疲れたのもあって、ホテルに戻ることにした。

自宅がホテルと言った時のノゾミさんは、驚きと納得とが入り混じった顔だった。

入るとメイドに、お客が来ていると言われた。

そのお客は、ダイヤだった。

もう少し遅くなる、と言ってたからチョット予想外だったけど。

久々に見たその顔は変わってなくて、なんだか、すごく安心した。

そして、ノゾミさんと対面したダイヤは驚きの新事実を言い放った。

なんと、ノゾミさんは、あのμ’ｓの東條希さんだというのだ。

え？、と思った。

かなりビックリした。

ノゾミさんも、隠す気は無かったけど、聞かれなかったから、と。

その後は、ダイヤを落ち着かせるのが大変だった。

なんだかソワソワしてて、フツーにワタシとノゾミさんが話していると、ワタシのことをなんか咎め始めた。

昼食後、ワタシがバルコニーでのんびり過ごしていると。

「ダイヤちゃん、可愛らしい子やね」

ノゾミさんが話しかけてこられた。

「それ、本人に言っちゃダメですよ、調子乗っちゃいますから」

「え～、いいやん、別に」

「色々言われるワタシの身にもなって下さいよ･･･ 笑」

「ふふっ、そうやね」

そんな、とりとめもない話をして。

「そうだ、鞠莉ちゃん」

「何ですか?」

「ちょっと今更やけど、言っとこうと思って。

あのさ、ロシアに連れてってもらったの、感謝してるんよ」
突然、そんなことを話し出すノゾミさん。
「でも、友達は見つからなくて、結局行くだけムダだったんじゃ…」
「いや、意味はあったよ。私自身、おかげで気持ちが晴れた」
「そう、ですか。それなら、良かったですけど」
「それにな、実は――、」

「ええっ?!嘘!!」
「そうなんよ、びっくりやろ?
その子のことを気にするのをやめて、途端に連絡が来るんやもん、驚いたで。
言うなれば、鞠莉ちゃんは、さしずめ幸運の女神、ってとこかな?」
「いえいえ、ワタシはそんな、何も…」
「…ねえ、鞠莉ちゃんは、悩みとかないん?」
「ワタシの悩み、ですか?」
「うん。イタリアで、私の悩み聞いてくれたやろ?やから、そのお礼」
お礼、なんて。
「…ツマラナイと思いますよ?」

「私の悩みも、十分つまらんもんやったやん？」

そう言われ、改めてノゾミさんの顔を見る。
その真剣な眼差しを見て、ワタシは、自分の悩みを打ち明ける決心をした。

＊　＊　＊　＊

「…なんや、悩み、ちょっと似てるかもなあ」
ワタシの話を聞いたノゾミさんは、そう言った。
「そう、ですかね」
「ウチら、実は似た者同士なんやない？」
「ウ～ン… どうでしょう？」
「ちょっと。そこは、そうですね、やろ？」
「そうですか？」
「そうやで」
悩みを打ち明けると、心が軽くなったような気がする。
「鞠莉ちゃん、これからのこと、占ってあげよか」
「占い？」

「うん、ウチ、こう見えても大の得意なんよ」
「じゃあ、せっかくなので…」
「オッケー！ちょっと待っててな、確か、ここに…」
　そう言ってノゾミさんが取り出したのは、
「タロットカード？」
「お？知ってるん？」
「後輩に一人、そういうのが好きな子がいたので」
「なるほどね～」

「よし、準備完了！ほな、いくで！」

　ビッ、と勢いよく束の中から取り出されたのは、
「太陽…？」
「…うん、太陽の、正位置やね」
「それで、意味は？」
「…知りたい？」
　うんうん、と首を縦に振って応える。

「…教えな～い」
「チョット、どういうことですか？」
「気になるなら、後で自分で調べてみて」
「ノゾミさ～ん」
「いいやん？せっかくなんやし、自分の結果は、自分で確認するんが一番やって」
　そう言いながら、なぜか荷物を片付け始めるノゾミさん。
「もう、帰っちゃうんですか？」
「うん、もうちょっと居ても良かったけど、長居するんもあれやし、ね」
「そうですか…」
「鞠莉ちゃん。…友達、大切にしてな。いつまでも、仲良くするんよ」
「ハイ、モチロンです！」
「うん、良い返事やね。
　…そうや、これだけは最後に言っとくわ」
「…？」
「実はな、この旅行の前にも、タロット占いしてん。
　それが、さっきと同じ結果やったんよ。…やっぱりウチら、似た者同士なんやない？」

「…そうですね、きっと！」
そう言うと、ノゾミさんは満面の笑顔をワタシに向けてくれた。
「…じゃあね、鞠莉ちゃん！」
「はい、またいつか、ノゾミさん！」
「うん、バイバイ」

そうして、ノゾミさんは淡島を後にした。

一枚のタロットカードを、ワタシに渡したまま。
「(そうだ、このカードの意味…)」
スマホを取り出して、検索する。
すると。
「……!!」
その結果は、予想外なはずなのに、なんとなく考えていたもので。
気付けばワタシは、ふっと顔をあげ、ノゾミさんが去って行った後を眺めていた。

そして、そんな時。
スマホに入る、着信音。
「(この音楽は、まさか・・・)」
恐る恐る、電話をとる。
もしもし、と、久しぶりに聴いたその親友の声は。
何故か、久しぶりという感覚はなく。
つい昨日のことのように思い出せる親友たちとの記憶が、頭を駆け巡る。
「…ワタシにとっての幸運の女神は、間違いなくノゾミさん、アナタだわ」
そう、自然と言葉が漏れた。